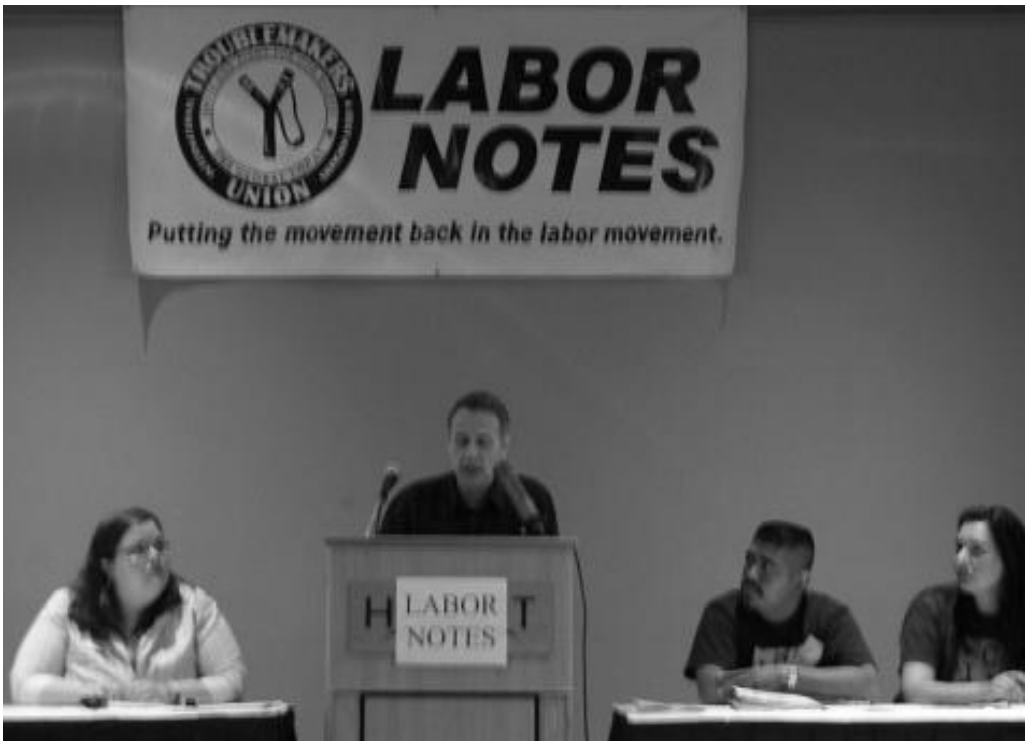
「労働情報」　号外　１９７７年５月２６日　第３種郵便認可　毎月２回　1.15 日発行

アジア太平洋の労働者をつなぐ

Links

2006 年 7 月
No.44

アジア太平洋労働者連帯会議（APWSL）日本委員会　機関誌（季刊）　定価 300 円
発行所　東京都台東区上野 1-1-12　新広小路ビル　協同センター労働情報　気付
TEL　03-3837-2542　FAX　03-3837-2544　E メール apwsljp@jca.apc.org　URL http://www.jca.apc.org/apwsljp/



【特集】レイバー・ノーツ大会ツアー

■フィリピントヨタのたたかいはつづく
■ユニオン全国ネットワーク訪韓団
■尼崎キャンペーン
■レイバー･アジアがついに始動

移民労働者の決起に盛り上がった
レイバー・ノーツ大会

深まる交流と学習の質

山崎　精一（APWSL 日本委員会共同代表）

今回のツアー

５月２日から９日まで１９人で訪米してきました。私にとっては４回目の訪米、２回目のレイバー・ノーツ大会参加の旅でした。前回のレイバー・ノーツ大会参加は１９９７年のＡＰＷＳＬオルタナティブツアーでした。それから９年間、今回はさまざまな事情から私個人の呼びかけとしました。ＡＰＷＳＬ、国際労働研究センター、レイバーネット日本などのメーリングリストなどで呼びかけたところ２１人もの人たちが参加してきてくれました。（お一人は病気のため、もう一人はビザが下りず残念ながら直前で参加取り消しとなり、１９人の参加となりＪした。）アメリカ労働運動への関心の強さを改めて痛感しました。

参加者は地域的には首都圏１２人、静岡２人、愛知３人、兵庫１人、福岡１人と散らばり、年代的には退職者と団塊の世代が目立ちましたが、首都圏青年ユニオンの４人や若手の研究者３人も含まれ、多彩なメンバーとなりました。

▲　左から二人目が筆者

初めてアメリカが体験したメーデー

今回の旅も第一の目的はレイバー・ノーツ大会に参加することでした。昨年夏のＡＦＬ－ＣＩＯの分裂以降初めて開かれる全米の労働運動活動家の大会でこの分裂がどのように討論がされるか、それが第一の関心でした。しかし、今回の大会のメインスローガン「下から連帯を築く」が示しているようにレイバー・ノーツの基本的な立場は、労働運動にとって重要な問題はナショナル・センターの幹部たちによって決められるのではなく、職場の労働者の闘いによって決まるというものです。そのような観点からすれば「勝利のための変革」派の分裂劇は組合員の討議も参加もない一部指導部だけの動きであり労働運動の展望とは無関係だということでしょうか？

大会で熱心に討論されたのはむしろ、直前に沸き起こった資格移民労働者の運動でした。移民労働者の権利行進に参加した二百万もの無権利状態の労働者の立ち上がりの衝撃は大きく、それをどう評価し、それに労働組合運動がどう応えられるのか、これが今回の大会に集まった活動家たちの問題意識だと私は受け止めました。アメリカではこれまでメーデーは取り組まれず、９月のレイバーデーが労働者の祭典でした。しかし、今年の５月１日は何十万もの移民労働者が一日の職場放棄でその存在をアメリカ中に示しました。大会組織者のマーシャ・ニーマイヤは大会開会挨拶で「世界中の他の国と同じように国際労働者デーがこの国で初めて祝われた。」と述べて喝采を浴びました。私は「全一日の休業は社会の虚偽を撃つものぞ」という今は忘れられたメーデー歌の一節を思い出さずにはいられませんでした。

目覚しい女性たちの活躍

９年前は飛行場から大会会場に直行していきなり討議の渦中に飛び込んで戸惑いました。今回はその反省から最初の二日は現場を回り、デトロイトの歴史や文化にも触れる機会を作りました。デトロイト到着の翌日には、ジョン・マクラフリンさんの企画と案内で労働者センターをいくつか回りました。労働者センターというのはアメリカでは労働組合を作るのが制度的に難しいので編み出された新しい組織形態です。地域を基盤として、多くの場合は移民労働者を対象に活動して、教育、相互扶助、労働相

談、法律相談、争議解決など幅広い活動をしています。日本のコミュニティ・ユニオンとほとんど同じ機能、活動をしており、労働法制度が違うので組合を名乗って交渉することができないだけです。今回訪れたのはメキシコ人の労働者センター。５月にできたばかりで、まさに移民労働者の決起の中でできたという感じでした。住宅街の中の民家の２階が事務所でエレナさんという元ＳＥＩＵのスタッフだったという女性が切り盛りしていました。庭で車座になって話を聞いている間にも電話での相談や来客がありました。

もう一つは、デトロイト政治再建委員会という黒人の組織です。これも黒人居住区の古い民家を黒人歴史博物館として運営し、周りの地域再生に取り組んでいました。ここでもＳＥＩＵで活動していたという黒人女性のロンダさんがフォード社の廃棄物不法投棄を鋭く批判していたのが印象的でした。

前回の報告集「アメリカ労働運動見てある記」で私は印象に残った人は皆女性であったと、感想で述べました。９年後の今回も全く同じ印象でした。組合スタッフから転じて労働者センターで活動しているエレナさんとロンダさんは既に紹介しました。レイバー・ノーツで日本との連絡を取ってくれたのはマーシャというニューヨーク事務所のスタッフでした。大会の開会の司会と大会終了後の関係者と国際ゲストの打ち上げパーティーの主催者はレイバー・ノーツ政策委員会のメンバーのシモーネさんでした。

ウェイン州立大学のウォルター・ルーサー図書館での日本労働運動セミナーを準備し、私たち訪問団の大学での宿泊、輸送、食事などを献身的に世話してくれたのはハイジ・ゴッフリート教授でした。大会終了後にフォードが最初にラインによる自動車生産を始めたルージュ工場を外から見学しましたが、この案内を引き受けてくれたのも団塊の世代の現場女性労働者でした。

アメリカでも女性が働き、家事責任を担い、その上で活動するのは大変です。男性の家事参加が日本よりは進んでいるとはいえ、日本のように公営保育園がないなど、社会福祉の面では遅れています。ハイジさんも合間に子供の送り迎えをやりながら私たちに対応してくれていました。そういう困難な状況の中にあって、新しい試み、変革を生き生きと担っている彼女たちに改めて感心しました。

日本からの積極的な発信
太くなったアメリカとのパイプ

もう一つ前回の訪問と違ったのは、前回は聞くだけ、受け入れるだけでしたが、今回は日本からの発信が活発に行われたことでした。分散会では、「民営化と闘う」分散会で稲田さんが公共サービス清掃労組の闘いの経験をパネリストの一人として報告しました。また自動車産別の会議では愛知の近森さんが全トヨタ労組の結成を報告して大きな注目を浴びました。他にも報告者を申し込んでレイバー・ノーツ事務局と交渉している内に、それではまとめて日本労働運動の分科会を作ろうということになりました。大会三日目の朝９時から「日本労働運動の現在その草の根の戦略」という分散会が持たれ、朝早くにもかかわらず多くの人が参加し、熱心な質問が出されました。

またウェイン州立大学でもハイジさんの熱心な勧めにより日本労働運動のセミナーが開催され、デトロイトだけではなく、広くミシガン州内の各都市、隣カナダのウィンザー市から研究者や活動家が集まりました。非正規労働者の労働実態、コミュニティ・ユニオン、反基地闘争などについて坂さん、中谷さん、千野さんの三人の女性が報告し、セミナー参加者の持っていた日本労働運動についての固定的な見方を打ち破る成果があったようです。

その他にも大会の分散会などでも、ツアー参加者の通訳を通じての発言や英語による発言がかなりあり、前回と大きな違いを実感しました。傍観者あるいは観察者として聞く、見る、というのではなく、まさに大会に参加したという感じがしました。

このような関わり、参加が可能になった理由の一つはマット・ノイズさんの存在です。マットさんはアメリカの組合民主主義協会のメンバーでレイバー・ノーツの事務局とも親しい関係です。彼は東京在住で国際労働研究センターのメンバーで、今回のアメリカ側との連絡調整と案内役を務めてくれました。というより、むしろマットさんの強い働きかけにより今回のアメリカ訪問が決まったといえます。したがってマットさんを通じて、レイバー・ノーツ事務局が大会を準備する過程を共有化しながら、日本での参加団の準備を進めることができました。

またデトロイト近郊には以前日本に滞在しＡＰＷＳＬ運営委員でもあったジョン・マクラフリンさんが居住しており、今回の訪問にも大きく貢献してくれました。先に述べたように一日目の企画と案内を引き受けてくれ、車の運転もしてもらい大いに助かりました。お連れ合いの仕事の関係でミネアポリスに引っ越すことになり、ミシガン州立大学でのジョンさんの仕事も変わらざるをえなくなり、仕事をまた探すと言っていました。しかし、先に紹介したメキシコ人の労働者センターで英語を教える活動を続けるためにデトロイトには通ってくることになるそうです。ＡＰＷＳＬの皆さんによろしくというこ

とでした。

前回もブリヂストン・ファイアストンやホテルニューオータニの争議支援を通じたつながりがあり、渡辺勉さんがウェイン州立大学にいて受け入れ準備をしてくれて可能になった旅でしたが、今回はさらに日米のつながりが太くなってきていることを実感した旅でした。前回とのもう一つの違いは、通訳体制の違いでした。前回も私が通訳を務めましたが、もう一人の通訳が急遽参加できなくなり、私一人で初めてのアメリカで通訳することになり、十分な通訳ができませんでした。今回は全国一般東京労組西部支部ＥＣＣ分会の野田健太郎さんという優秀な通訳と二人で行うことができました。また静岡の望月吉春さんがＦＭ発信機付の小型マイクを用意してくれたのでどこでもＦＭラジオを使っての通訳が可能になりました。この準備なしには２０人の人に同時通訳をすることは不可能でした。

急に決まった訪米計画にもかかわらず、２０人もの人が参加し、それぞれ多くのものを学び、持ち帰ることができました。その一部はこのリンクスにも報告されますが、訪問団としても報告書を秋には発行する予定ですので、そちらの方もお読みください。今回の旅を呼びかけた者としては参加者の皆さんのご協力でこの企画が成功したことを感謝し、今回の出会いと交流がまた次の出会いと交流へと広がっていくことを期待しています。

デトロイトで開かれたレイバー・ノーツ大会に参加して

坂　喜代子（均等待遇東海、名古屋銀行パート労働者）

▲左から中谷さん、小畑さん、坂さん（筆者）

日本各地でアメリカの労働運動の刺激を受けて

私にとっては2004年9月にウェイン州立大学で開かれた働く女性の日米ワークショップに続き二度目のデトロイトでした。2000年5月に来日されたアンディ・バンクス氏のWTO・シアトルの闘い（民衆が国際連帯を武器に、経済のグローバル化に対抗した歴史的な出来事で、５万人の人々がシアトルに集まり、立場の違いを超えて多国籍企業・大国だけを利する貿易・投資の自由化に反対し、WTOミレニアム・ラウンドをストップさせた)とアメリカ労働運動(非正規雇用の労働者組織化と国際連帯)の講演を聴講したあと、翌月の6月にニューヨーク・国連女性2000年会議に、連合代表のNGOとともに参加し、AFL-CIO傘下の女性組合役員との交流を経験しました。その後も、国際労働研究センター主催のステファニー・ルースさんのリビング・ウェッジの講演を法政大学で、大阪の研究会「職場の人権」主催のケント・ウォンさんのアメリカの移民労働者の組織化の講演に刺激され、この間アメリカの労働運動に興味を持ってきました。

これまでオランダのワーク・シェアリングのツアーをはじめ。フランス・ドイツ・スウェーデン・アメリカなどの労働組合・政府や政党・諸団体への調査や交流経験があったものの、英語を話せない私にとっては、国際的な活動のジレンマはその場で即座に一歩踏み込んだコミュニケーションがとれないことでした。今回は優秀なレベルの高い通訳のおかげですっかり大会参加者のひとりとしてさまざまに活動や交流できました。

「下からの連帯」

レイバー・ノーツ大会は、アメリカ労働運動の民主的改革と再活性化を目指す労働組合活動家の集団で隔年ごとに全米大会が開かれています。全大会の司会者も女性で発言者も女性が圧倒的に多く活気に満ちた大会でした。

参加者はアメリカの活動家だけでなくフランス・ベルギー・スウェーデン・チリ・メキシコ・ロシア・イラク・韓国・ブラジル・アルゼンチン・カナダ等、世界各国から一千名ほどの参加がありました。

世界経済が「グローバル化」し「グローバル競争」が激化しているということを実感させられた集会でした。全体会では、全米にチェーン店を持つ巨大ファーストフードの企業タコベルの闘いが報告され具体的な戦略を聞くことができました。経営者と対決する時は、小さな会社でも超大型企業でもそのための闘う技術が必要である、と・・・。その具体的な中身を紹介したいと思います。

＊イモカレー地区タコベルボイコット運動

数年前、フロリダ南部のイモカレー地区の労働者はタコベルボイコット運動を宣言した。人数も少なくお金も力もない労働者達は、砂漠で水を探すことと同じくらい困難な闘いで勝利するとは誰も信じていなかった。しかし、4 年間のストライキや全国に呼びかけたボイコット運動の闘いでタコベルはやっと交渉の場についたのである。そして、一年間かけて労働協約を結ぶことに成功した。26 年間も正義がなかったけれども、労働者は地の底から這い出し、交渉して労働者としての権利を確保した。

学生・青年労働者・宗教者・消費者・農業労働者・メディア等の共闘の戦術が成功したのだ。ゼネストなどで地域の労働者も闘ったが他の支援者も、それぞれ独立した自治的な運動で労働者はフロリダからカルフォルニアにまたがって運動をした。

学生農民共闘では、学生だけでなく若い労働者も闘ってくれた。宣伝対象が若者で、学生も低賃金労働者であり、敵を明確にするスローガンを掲げた。学生たちはハンガーストライキをして 22 の大学からタコベルを追い出した。宗教者は、教会の基金やカンパを活動資金に提供し、宿泊や食事で支援するなど役割の違いを超えて支援した。そしてまた、様々な農場で働いている労働者や出荷業者・加工労働者とも共闘できた。トマトの 90 パーセントがフロリダで生産されていることから「トマトの買い値を上げろ!!」と、トマトを生産する農業生産労働者と共闘し、地域に根ざした農場労働者や食物労働者のピンハネを許さない運動となった。消費者は「そのハンバーガーはどこのトマトを使っているのか」と質問するなど、まさに共闘と信頼が結実したのだった。このイモカレーカレー地区で起きた労働運動は運動の指導者を育成することにもなった。メディア戦略としてマスメディアを使わず自分たちのメディアをつくりホームページは 150 万回もヒットしている。次は、マクドナルドへのキャンペーンで闘いは始まっている。私たちの富を奪っているものを許さない！！この国は移民の国であり、闘争の国である。人生の闘いに終わりはない。

大会が開かれたハイアット・リージェンシー・ホテルの前の大型ショッピングモールの中のフードセンターにあったタコベルは閉鎖されていました。

世界と日本の関わり

多くの分科会が開かれましたが、世界的な規制緩和と民営化の流れはどこの国も同じで、現場での報告を聞くたびに一国経済が徐々にグローバルになりつつあることを実感しました。集会のテーマは「下からの連帯」でしたが多国籍企業等による資本の流動化の結果、資本のための労働コスト・社会的コスト・環境コストを削減する「下向きの競争」に対して世界的な労働者の連帯、まさに「下からの連帯」の呼びかけでした。アメリカの自動車産業の中心地だったデトロイトは荒廃し、そのまま放置されているビル群や住宅に 100 年後の愛知のトヨタ?をみる想いでした。今期の収益も GM を抜く勢いで伸びているトヨタですが、他国の自動車産業をアメーバのように食いつくしています。自動車産業で働いてきた労働者が貧困化している、とベルギーの若い労働者が報告しましたが、これらは、遠い国の出来事ではなく私たち日本の働く女性が非正規化していることと深い関わりがあると思います。

規制のないグローバル経済では、社会的弱者といわれているマイノリティ・女性・障害者の人々の労働条件はさらに悪化し、格差が拡大します。日本でも女性の非正規化の拡大・フリーターの増加はこのことを示しています。

メキシコ移民の闘い

メキシコ人のための労働センター委員で SEIU でも活動していたエレナ・ヘラダさんは、ひっきりなしにかかってくる電話に対応しながら次のように実態を話されました。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

デトロイトの労働者とラテンアメリカの人のためのコミュニティセンターは 5 月 1 日に開かれたばかりである。メキシコ人移民はフォードの自動車工場で働くためにつれてこられた。1920 年代にメキシコで募集され私の両親を含め 15000 人が移住してきた。29 年から 30 年の大恐慌により多くのメキシコ人が返され、32 年にはデトロイトに残ったメキシコ人は 4000 人になってしまった。私の両親も何もない状況の中でメキシコに帰ったがその後、また戻ってきてコミュニティを作り始めた。30 年代から 80 年代のメキシコ系移民は、ＮＡＦＴＡ（北米自由協定）ができるまでは約 1%ぐらいで、3 万人だったコミュ

ニティが、現在20万人に増えている。

第2世代や労働組合で活躍する人たちが集まり、大学で講義したり、様々な教育活動をしている。チカーノ（アメリカ生まれのメキシコ人）の人たちが強制送還されたことなどの歴史の編纂をし始めた。今、当時と同じことが我々移民に行われようとしている。

10代後半から20代の女性が、労働問題や解雇問題、経営者の性的行為に応じなければ賃金が支払われないなどひどい性的虐待問題などの相談に来ている。セクハラなど個人の相談も多いがグループで来る人たちをできるだけ扱うようにしている。労働組合や個人の活動家たちの緩やかなネットワークを作る活動をし、ＡＦＬ－ＣＩＯに労働者センターに資金援助するよう申請している。

日々の労働者の相談を受け、経営者と交渉したり、闘ったりしている。普通の組合ではこういうことはできないが、コミュニティとして直接に交渉し、組合と協約を作ることがいかに有利かということを宣伝してくる。デトロイトのマキーラ（特別の援助がある地域）のような劣悪な労働条件と同じ、東芝などの電機メーカーの液晶パネルを作っているが、そこで働く若い労働者たちは一人も正式移民ではないので、経営者たちは好きな賃金しか払わないし、週7日働かせている。労働生産性を上げ賃金を下げるということに怒り、職場放棄して勝手にストライキを始めたために、解雇された人もいる。

オーバリンという食肉加工会社で自然発生的に職場放棄をして、3月27日の移民法改正反対デモに参加した労働者から、デモに行って解雇されたと相談された。経営者はデモに参加したから解雇したと公然と言っている。コミュニティで昼食時間にオーバリンに出かけてピケを張った。これが全国ネットで放映されたため、世界中に知れ、メキシコ政府からも問い合わせがあった。メキシコのテレビのインタビュー番組で「我々の祖父の世代には応援がなかったが今は我々がいる」とメッセージが届いた。

英語を知らないと様々な不利益に遭うので民主教育の方法を使って英語教育をしている。彼らは新しい文化で行動しないがアメリカの市民権を得ることが唯一の希望なのだ。現在の移民法改正のいく末を不安視している。一定の扱いを受けるために活動しなくてはならず活動場所が必要なので寄付を集めている。

自分を守る有効な法律的や方法はないが、勇敢に戦う彼らが孤立しないように「1人ではないよ。我々がいるから」ということを教えなければならない。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

私たちが、「会社に押しかけるときは何人くらい？そしてその行動の法的根拠は？」と聞くと、「Ｅメールを出して集まれと連絡するので何人集まるかわからない。私たちに法的根拠はないが、経営者も不法移民を雇っているので警官を呼ぶと自分も逮捕されるから訴えられない」と答えられ、また、「相談に来た人が次には自分が相談にのれるようになるのか？」の問いには、「自分が助かった人は家族も入れたりして、また連絡があればピケに参加している」とのことでした。

このように組合ではなく地域の連帯で事業主と交渉しているようです。

現場からの世界連帯

ウェイン州立大学のレイバーセンターでは、日本の労働運動のセミナーを開催しました。日本のパート労働者の実態(坂)と自治体で働く非常勤問題(中谷)・神奈川県のアメリカ軍の基地問題(千野)をそれぞれが報告しました。今回日本では、男女雇用機会均等法改正の審議が厚生労働省の衆・参両議院に持ち込まれ、重要な間接差別の禁止事項が限定列挙になってしまいました。審議の的になった間接差別の実態を収録した私のパートの賃金差別の実態も入ったWWN（ワーキング・ウーマン・ネットワーク）作成のDVDを大会参加の活動家や研究者に渡しました。

日本の労働運動のセミナーはウェイン州立大学のハイジ教授により企画されたものでした。ハイジさんは世界的な女性労働について研究されており、セミナーの参加者である大学の研究者やAFL-CIO(アメリカの労働組合ナショナルセンター)にデータを示しながら話されました。日本の女性労働には、特に詳しく、自ら補足説明されるほどの熱意でした。それもそのはず、ここ二年ほど東京女性ユニオンを中心とした労働者の意識改革をめざした働く女性労働者マニュアル作りの一翼を担い、日米女性労働者教育ワークショップを支えた人です。帰国後、あの日本のセミナーは大成功だったと報告を受け取りました。

私が今回デトロイトのレイバー・ノーツでみたものは、多くの分科会で語られた、フランスの、不安定雇用を拡大する「新規採用契約」（CPE）に対してフランスの学生・労組などが空前の規模のデモで撤回させたCPE反対闘争や、アメリカでの移民法に反対するデモなどに見られる、連帯の力がうねりになっている労働者の底力でした。グローバルな視点で世界の労働実態を知り、若い労働者がつながれるような現場からの世界連帯をめざす闘い以外に、こ

のグローバル化した企業には立ち向かえないと痛感しました。ロシアでもトヨタが進出し稼動体制が整いロシアの企業より少し高めに設定された賃金を餌に工場労働者の募集が始まっています。多国籍企業と本気で闘える労働組合や市民団体の国際的なネットワークの必要性を実感しました。

次回のレイバー・ノーツには日本の若い労働者と一緒に参加するところから始めたいと思います。

Building Solidarity From Below

現場からの連帯を築こう

小畑精武（自治労公共民間・江戸川ユニオン）

▲左が筆者

「レイバー・ノーツ」

かねてから参加したいと思っていた「レイバー・ノーツ」の大会（5月5日～7日）に、60歳になってはじめて参加できました。その感動と大会の熱気はまだ脳裏に焼きついており、元気をもらって気分一新、決意新たな活動はこれからです。

「レイバー・ノーツ」はアメリカ合衆国（以下アメリカ）の「労働情報」といえます。A4ほどの月刊誌、厚さは16ページ、日本の「労働情報」（月2回、B5、24ページ）より少し情報量が少ない感じですが、掲載される職場、地域の運動量は日本よりたっぷり、政治課題は少なく、日米の草の根の運動の差が出ている感じがします。日本の「労働情報」は1982年に創刊され、当初は全国交流集会をしていましたが、今はしていません。レイバー・ノーツは1979年の創刊です。自動車の街で労働運動の強い伝統があるミシガン州デトロイトに本部事務所を置き、ニューヨークにも事務所があって、全国で8人の専従者がいるNPO（正式名称は「労働教育・研究プロジェクト」）組織です。最初のレイバー・ノーツ大会が開かれたのが1982年ですから、日本の労働情報の創刊と同じ年です。ほぼ2年に1回全国大会を開催しています。会員制ではありませんが、定期購読者は約9,000人だそうです。レイバー・ノーツの発行、全国大会以外にも調査研究、「トラブルメーカー・ハンドブック」などの本の出版、学生の研修などを行っています。

今集会のスローガンは「Building Solidarity From Below（下から連帯を構築しよう）」でした。このスローガンはアメリカ国内の労働運動にとっても、また国際連帯にとっても重要な意義を持っていると思います。なぜなら、アメリカでは昨年夏に開かれたAFL-CIO大会で、AFL-CIOの組織方針をめぐって全米サービス労組（SEIU）やティームスターズ（IBT）など5産別組織、約５００万人がAFL-CIOを脱退し、新しいCTW（勝利のための変革）を結成、上部段階では分裂状態になっているからです。こうした上部の分裂を乗り越えて、職場、地域で連帯して闘っていくことが、現場の活動家に問われていることは言うまでもないでしょう。

また、4月から5月1日にかけて全米140の都市でラテン系移民労働者の大デモンストレーションが展開され300万人が参加し、ロサンジェルスのロングビーチ港などではトラック労働者による地域ストライキ状態になったそうです。こうした新たな移民労働者の人権を求める闘いにいかに地域から連帯していくのか、そしてますますグローバル化するアメリカ資本・経済に対して国境を越えた連帯をいかにつくっていくのかも、同時に問われているからだと思います。

初参加の感動

日本からのわれわれの団は19名、APWSLの山崎精一さんの呼びかけに応じて東京、名古屋、兵庫、福岡から参加した人たちです。私のように60を越えたリタイア組から20歳前半の青年ユニオン組合員、所

属は労働組合員、大学の研究者とアメリカの組合民主主義協会（マット・ノイズさん）、男性14人、女性5人でした。参加を予定し、事前に研究会も持っていた千葉商大の金先生は不当にもビザがおりず不参加となりました。「自由な国」アメリカの「不自由さ」です。大会は2年に1回ですが、これまでレイバー・ノーツの本部事務所があり、自動車都市であるミシガン州デトロイトで開かれてきました。大会には自動車産業と労働の研究者で「リーン生産方式の労働－自動車工場の参与観察にもとづいて－」の著書がある岡山大学大野威助教授が日本から直接個人参加されていました。

団は5月2日に成田を立ち10日に帰国、APWSLの前共同代表稲田順一さんと私はシカゴをまわって14日に帰国しました。私がはじめて訪米したのは1982年。江戸川区労協オルグとしてニューヨークで開かれた国連軍縮総会にむけ「反核100万人デモ」に参加した時です。その後1990年にNPO、99年、2000年にはリビング・ウェィジ運動、オルガナイザー講座や労働者センターなどの事務所を訪問し、活動を聞くことが主でした。5度目の今回はじめて現場の労働者・活動家が集う大会に出席ができました。分科会討論にも山崎さんや野田健太郎さん（全労協全国一般）の名通訳にも助けられ参加ができたことを嬉しく思います。「あこがれのレイバー・ノーツの大会に参加できた！！」という感激はひとしおです。

日本の大会は、主催者や来賓の挨拶、集会基調の提起が延々と続き、分科会の時間が少なくなるのがふつうですが、レイバー・ノーツの大会は違っていました。受付は12時からですが、すでに9時からはテレコミュニケーション労働者のミーティングが開かれており、午後1時には多くの分科会や職種ごとのミーティングが始まりました。夕食後にようやくメインの全体集会が開かれました。7時半から9時まで「職場の力」と題して、大会実行委員会の事務局長といえるレイバー・ノーツ編集委員会のマーシャ・ニーメイジャーさんが基調報告、予定していた電機労組活動家に代わってシカゴのメキシコ系移民労働者、ジュリー・ワシントンさん（全米教員組合・ロサンジェルス副委員長、アフリカ系女性）、トム・リーダムさん（ティームスターズ・ローカル206書記長・会計）が報告と問題提起を行いました。（夜9時まではビールが飲めなかった？！呑兵衛の日本人にはつらいとおもわれるかもしれませんが、なぜか気になりませんでした。演説がよかったのでしょう。）大会参加者は老若男女900人、なかには白髪で車椅子に乗って参加している高齢者、後に賞をもらって挨拶した人（名前は忘れたが）はなんと90歳！若い人、女性が多いのも日本と違った印象です。

マーシャ・ニーメイジャーさんは大会のオルガナイザーで、5月3日にデトロイトにあるレイバー・ノーツ本部事務所を団で訪問したとき、事務所はテンヤワンヤ、それでも私たちに立ったままながらも説明と事務所内を案内してくれました。あとで聞いた話ですが妊娠6ヶ月の身重でした。世代交代をすすめるレイバー・ノーツ編集委員会の新しい世代を代表している小柄なマーシャさん、大会の基調は明確でした。第一に「職場で闘わねばならない」、第二は「組合員と役員との組合民主主義を」、第三は「譲歩には“ノー”と言おう、労使協調の哲学を拒否しよう、敗北から学ぼう」、第四は「戦略的に組織化しよう」、第五は「職場のみんなのために闘うビジョンが必要だ」「職場の分断は経営者の夢だ、現場からの連帯は私たちの夢で経営者の悪夢だ」、第六は外国からの参加者が100人（17カ国）に及んでいることを報告し、資本のグローバル化に対する国際連帯を強調しました。

組合民主主義

ロサンジェルス教員組合のワシントン副委員長は恰幅のいいアフリカ系女性、改革派です。改革派は昨年42,000人を有するロサンジェルス教員組合の主導権を握り、地域の父母や生徒と連携して人種差別に反対し、よりよい地域教育をめざして闘っていること、地域社会と連携する労働運動のビジョンについて報告しました。

TDU（直訳すると民主的組合のためのティームスターズ）のリーダーとして今秋のティームスターズ会長選挙への出馬が予定されているトム・リーダムさんは、組合民主主義の発展による組合の再建を力強く訴えました。ティームスターズは元々馬車の御者という意味で1903年にデトロイトで結成されました。戦闘的なティームスターズの歴史は映画「フィスト」「ホッファー」などで紹介されています。トラック運転手を中心とした力強い組織化と運動を展開し、一時は200万人近い組合員を有していました。しかし、現委員長の父親ジミー・ホッファー会長など幹部のマフィアとの関係が問題となり、ケネディ大統領政権下で腐敗が摘発・追及されました。TDUはそうしたティームスターズの歴史のなかで、組合員を主人公とする組合の民主化をすすめてきた二つの組合内部組織が、1980年に統合された組織です。機関紙「コンボイ・ディスパッチ」は1975年創刊されています。1991年にはTDUのロン・ケアリーがはじめて会長選挙に勝利し、95年のAFL-CIOの会長選挙では「改革派」のジョン・スウィニーを支援し、

97年のUPS闘争を勝利に導きましたが、財政問題で97年に退陣を余儀なくされています。

レイバー・ノーツ大会に先立ち5月3日に訪問団は、TDUのデトロイト専従であるピーター・ランドンさんからティームスターズやTDUについて聞きました。TDUは130万人のティームスターズ組合員のうち1万人が参加し、全国大会では30万票のなかで11万票を獲得する影響力があります。全国に専従オルグが8人いるそうで、会費は年間45ドル（約5000円）、執行委員が25人、大会は年1回開いているそうです。

TDUにみられるように、アメリカ労働運動の特徴の一つは「組合民主主義」が強調されていることです。組合民主主義協会（AUD）という組織もあり、訪問団のマットさんはそこの一員です。TDUは組合の腐敗に対して闘ってきた30年にわたる長い歴史がありますが、90年代からは労働組合の官僚化に対し現場の組合員一人一人を主人公にしていく組合民主主義が重要視されてきました。レイバー・ノーツも1999年に「Democracy is Power－Rebuilding Unions from the Bottom Up（民主主義が力だ－下から上に組合を再構築しよう）」（マイク・パーカー、マルサ・グルエル著）を発刊しています。そのなかで「組合員は組合をいかに運営するかについての見解について組織する権利を持っている。このことは意見を表明する権利以上のものを意味している。」そして「民主主義は労働組合の力の源泉であること。単に道徳的な問題ではなく、今日の経営や政府から攻撃に向き合うための組合の能力の基本である。」ことを強調しています。とくにアメリカでは労働組合の公的承認には、職場・職種など組合の単位で過半数を獲得しなければならないという、ニューディール時代につくられた全国労働関係委員会によるルールがあります。日本のように労働組合（ユニオン）に一人でも入れて交渉が法的に可能となる社会的システムはないのです。少数派労働組合は設立できず、TDUのように粘り強く組合の多数派をめざすことになります。このことは政治と政党システムに似ています。言論の自由はじめ民主的なルールが不可欠で、多数与党が権力を握り、少数野党は意見を表明する権利はありますが別個に少数派の国や自治体をつくることはできません。事実、コーカス（Caucus）という組合組織内の自主的組織活動が認められ、そこが基盤となって役員・代議員立候補者のグループ（スレート）をつくって役員選挙などが争われます。TDUはコーカスですが、女性のコーカス、民族や人種によるコーカスもあります。

日本の職場においては、言論の自由度は低く、組合民主主義のレベルは労使一体の労務管理体制の下で、自由にものが言えない状況があるようです。今回新たに結成された「全トヨタ労組」からの参加者があり、大会でも日本の、否世界の最大自動車会社の組合からの参加と言うことで、注目をあびました。こうした少数派労働組合ができることは職場や組合で少数意見が無視され、組合民主主義が日本では根づいていないことを示していると思います。

少数派からの闘い「労働者センター」と新たな地域運動

職場、職種での運動とは別に、地域での労働者運動が移民労働者のデモにみられるように、全米で大きな広がりをみせています。地域における無権利の移民労働者、低賃金労働者、中小企業・商店労働者の拠点が「労働者センター」で、全米で140を越えています。日本のコミュニティ・ユニオンにとても似ていますが、労働組合としての団体交渉権は持っていません。こうした労働者センターのはじめての全国的集いが開かれたのが2003年のレイバー・ノーツ大会でした。労働者センターは地域草の根で労働者、とくに低賃金の移民労働者の組織化をすすめています。今回の大会ではさらにネットワークづくりと組織化をすすめるために開かれ、分科会には20のセンターから約40人が参加しています。労働協約締結権を持つまでの職場多数派に到っていない少数派の労働組合としての組織化活動をすすめている事例の報告がありました。

ミシシッピー州の「人間的権利のためのミシシッピー・労働者センター」は今回の大会で「トラブルメーカー賞」を受賞しました。このセンターは、人間的権利の南部オルガナイザー会議に参加した活動家によって1996年12月に設立され、センターでは専従者を置いて、低賃金・未組織労働者の組織化支援、民衆教育、法的代表活動、研修活動をすすめています。非暴力直接行動を通して、センターは職場や地域で人間的権利が侵されていることを明らかにし、労働者の権利と人間的権利は同じであることを訴えてきました。

センターのオルガナイザー、カーミット・ムーアさんは食品労働組合、UAW（全米自動車労組）、AFL-CIOの黒人協会など組織労働者との連携を図っています。「労働者とわれわれは組織化や雇用主との闘いを共に闘っています。ミシシッピー州の組織率はわずか5%しかないのですから。」と報告しました。また、地域では教育格差に取り組むための教育委員会との交渉、黒人女性の力を引き出すこと、台風カトリーナ被害者支援などをしているとの報告も分科会でありました。

地域社会が労働問題に取り組む事例は94年からのリビング・ウェィジ（生活賃金）条例運動が典型です。今大会は労働者センターの分科会は設定されましたが、リビング・ウェィジ条例運動の独自分科会はなく、リビング・ウェィジの地域運動は終わったのか心配しました。しかし、「地域社会との連帯の分科会」に出てその疑問は解消！分科会にはワシントンでリビング・ウェィジ運動をすすめるリビング・ウェィジ行動連合の大学を卒業したばかりの若い活動家が参加し、大学の清掃労働者、食堂労働者などを対象とするリビング・ウェィジ運動の展開を報告していました。「リビング・ウェィジ」の著者でCTLS(国際労働研究センター)の招きで来日したことがあるマサチューセッツ大学の研究者ステファニー・ルースさんも大会に参加していました。彼女に「リビング・ウェィジは自治体条例運動から横へ広がっているのですか？」と聞いたところ、「そうですね。連邦最賃引き上げ議案がケネディ議員から出されています。また、フロリダなど州最賃の引き上げが広まっています。介護労働者等低賃金労働者のリビング・ウェィジ運動も広がっていますね。」との答えが返ってきました。

移民労働者の闘い

さらに、移民労働者の低賃金を引き上げる運動がアメリカの地域で展開されています。今大会でラテンアメリカの労働運動と政治の報告が分科会であり、アルゼンチンはじめ多くの参加者がいましたが、私はフロリダ州のイモカレー労働者連合（CIW）の報告に大変興味を持ちました。先日、連合が行ったマクドナルドへの一斉オルグ行動の目標は店長、マネージャーなど店舗管理者が主目標で、課題は「残業未払い」「長時間残業」などでした。アメリカでは店舗の多くは日本のコンビニのようなチェーン店でオーナーがいて、そこに雇われている圧倒的な移民労働者の低賃金が問題になっています。さらに問題はイモカレー労働者連合が提起した食材として使われるトマトを収穫する労働者の低賃金です。彼らの闘いはタコベルというタコスなどの全国チェーン店に対する「対企業（コーポレート）キャンペーン」として位置づけられています。運動は96年から開始され、当初はティームスターズなど労働組合から成功しないとの批判があったそうです。しかし、4年間闘い人間的な労働条件を実現することができました。フロリダからカリフォルニアまでのタコベル店舗へのボイコット運動、ケンタッキーにある本社への行動さらに300に及ぶ大学でのボイコットは100人単位でピケットをはったそうです。マスコミへの報道の働きかけも功を奏し、企業イメージの悪化を恐れたタコベルはトマト買取価格を引き上げ、労働条件改善（バケツ1杯41セントから60セントへ）を約束し、収穫を請け負う企業に「企業行動規範（code of conduct）」として実行させることになったのです。イモカレー労働者連合は、①学生運動の支援（300の大学でボイコット）、②ピケで安いものがどこから来ているのか考えさせた、③宗教者との連携、④トマト供給請負企業とタコベルとを分断した、⑤要求は単純で本質をついたものだった、⑥支持基盤が広がったこととが勝利の要因と総括しています。ちなみにこの運動のスタッフの賃金はトマト収穫労働者と同じ賃金だそうです。「次のターゲットは社会的責任企業を自称しているマクドナルドだ。」と意気込んでいました。タコベルに続いて、マクドナルドさらにサブウェイ、バーガーキングなどが次のターゲットのようです。

「労働組合化する展望は？」との質問に対して「良い質問だ。労組とは切り離されてきたが、AFL-CIO、SEIU、IWWなど耳を傾けるようになってきた。だがNLRB（全国労働関係員会）の法律から農場労働者ははずされ、団結権がカリフォルニア州では州法であるが、他にはない。」との回答でした。おそらく今後は労働組合との共闘を強め、いずれ労働組合としての活動になっていくと思われます。

今後へ継続参加しよう

日本からは、「民営化との闘い」の分科会で稲田順一さんは自らの清掃下請けの闘いを報告しました。全トヨタ労組の闘い、自治体における臨時・非常勤・パートの実態と運動、銀行における女性差別の実態と女性労働運動の報告がなされ、研究者によるコミュニティ・ユニオンについての報告も行われました。またウェイン州立大学では日本労働運動に関するセミナーも開かれ、国際的な交流、提起ができたことは大きな意義があったと思います。ただ、十分な討論時間がなかったことは残念でした。私も以前CTLS（国際労働研究センター）で報告した「コミュニティ・ユニオンの現段階と課題」を英訳したものを、APWSLの中原さんに増刷してもらい100部持参し、分科会で配布したり紹介しました。イラク戦争に反対する労働者連合の分科会にも日本の団からも参加。イラクの労働組合や息子をイラクに送っている家族の参加もみられました。私は日本で使った「イラク派兵反対」のプラカード用紙を持参し、担当者に渡したら即座に柱に貼ってくれました。

外国からの参加者の自己紹介と国際連帯を構築するための分科会も開かれ、インターネットを含めた

ネットワークの構築などが提案されました。JWJ（雇用に正義を）ミーティングではアジア人労働者の連帯強化が討議され、さっそく大会後に参加者のメールアドレスのリストが送られてきました。それでも、現場の交流を痛感させられる“ビックリ”がありました。大会後に公園で外国からの参加者とレイバー・ノーツ事務所との合同「ごくろうさん」ピクニックを行った時、アルゼンチンの女性活動家は私に「日本人は黄色くないんですね？」と尋ねてきました。たしかにアメリカは様々な人種がいますが、日本人＝黄色い人種の先入観がいまだに通用していることにショック！現場での直接交流の必要をつくづく感じた次第です。

次回は２年後でしょうか？草の根労働運動の国際交流・連帯をすすめていくために、今からお金を貯めましょう。英会話を学習しましょう。日本の闘い、アジアの闘いを世界に、アメリカに、APWSL＋アルファーの国際交流・連帯を広め、深めるために、多くの老壮青、男女の参加を期待します。

職場での組合を再認識

望月吉春（APWSL 静岡　安倍川製紙労働組合）

レイバー・ノーツ大会に４回も行ったのだから、と人に言われて自分の過去を振り返ると、一回目は11年前、安倍川製紙労組に入って、わずか一ヶ月そこそこのとき、二回目はAPWSLでツアーを行った９年前。そして２年半前と今回。

前回と今回は、いまや日本最大のトラブルメーカーとなった鉄建公団原告団の国鉄闘争を紹介することを目的のひとつとはしていましたが、同時に組合活動の日常に関して、自分の方向性への意識も持ち始めての参加でもありました。

少数組合に所属している中で、先輩から「職場の運動をサボっちゃいかん」、「執行部が“代行”する組合でなく、組合員の日常を組織した要求を」といわれ続けてきました。その上で、企業の枠にとらわれない闘いを考えるのに、米国の産業別の組合や、社会運動ユニオニズムにも大変興味を持って、これまで日々の労働運動をしてきたのでした。

日本のある組合研究者は日本の企業別組合を「人材の無駄遣い」といっていました。確かに、そこを企業を超えて効率化できれば、仕事も楽になるだろうし、組合役員のなり手も増えるのではないかな、という期待は大きなものがあります。

しかし、今回参加したレイバー・ノーツの分科会では、日常の組合活動を切り盛りする職場委員の桁違いの少なさに驚き、職場の問題を取り上げようにも、職場組合員が声を持っていこうにも、「こりゃあ大変だなぁ」と感じました。

レイバー・ノーツの良さは、これらの問題を「学問的」な課題ではなく、現場で苦労している人たちの意見として出し合っていることではないかなとは思うのですが。

今回はまだ「違いを認識」しただけで、整理ができていませんが、次の大会までに多少の実践を積み上げることで違う意識で参加できればなぁ、と、次回のレイバー・ノーツ大会を楽しみに、相変わらずの組合活動を続ける日々です。

有意義だった二度目のアメリカ・ツアー

稲田順一（元APWSL共同代表　元公共サービス清掃労組）

小生は、昨年１１月に３４年間勤めた協立輸送（株）を退職し、今は年金生活者として、日々つつましく過ごしています。

とは言っても結構おさそいが多く、０５年１１月１９日の退職と同時に２４日まで二度目の泰麺鉄道ピースサイクルと、０６年2月１４日から２０日まで同じマレー半島ＰＣでシンガポール、マレーシア、タイに行ってきました。

また、冬の間はスキーを楽しみ、数多くの退職激

励会をやって頂きました。
　そして、5月２日から１４日までアメリカ旅行と、現役の時と変らず時間に追われる日々が続いています。ただ、現役の時と違うのは有給休暇を取らなくても良いので、休みが取れずに旅を断念することはありませんが、お金と相談しなくてはなりません。

　今回のアメリカ旅行は９７年に続いて二度目です。今度もレイバー・ノーツの大会が主でしたが、開催地はデトロイトで同じでも、前回はクリーブランド、ピッツバーグ、ロスアンゼルス、メキシコのティファナと多くの都市を回ってきましたが、今回はデトロイトだけで、それ以外はカナダのウインザーで夕食（バーベキュー）を（これは前回も同じ）食べただけでした。また、前回はデトロイトまで直行便（ノース・ウエスト）で行ったのですが、今回はノース・ウエストでは組合が争議中ということで、使わないで欲しいと要請があって、ニューヨーク経由のコンチネンタルで行ったために、フライト時間が１７～１８時間と長旅になりましたが、空港からと機内からニューヨークを垣間見ることができました。
　ただ、アルコールが機内ではサービスではなく、ビールでもワインでもブランデーでも５ドル出さないと飲めなかったため、飲み放題を期待して乗った小生はがっかりしました。
　レイバー・ノーツの大会の前回との大きな違いは、マットさんのお陰で、事前の大会事務局とのやりとりで、プログラムに日本のメンバーの紹介やスピーカーの氏名が載ったり、原稿のメールでのやりとりなどができました。また、近森さんが自動車労働者の中で全トヨタ労働組合の結成の話を、小生は民営化と闘う公共清掃の闘いを報告することができました。また、日本の労働運動を報告するコーナーも設けられ、アメリカの話を聞くだけでなく、日本の労働運動の実態を報告できたことは大きな成果だと思います。そのお陰で今後につながる交流や名刺交換が出来たことも良かったと思います。そして、何と言っても今回素晴らしい通訳をして頂いた山崎さん、野田さんがいたからこそすべてが達成されたし、ＦＭラジオも大変役にたちました。事前学習も大きな成果を果たしたと思います。
　今回の大会での印象はスローガンが「下から連帯を築く」でしたが、話の中に必ず今の労働組合の指導者はダメだから、下から運動を作らなければ、という意見が出ました。移民の問題とか労働者センターの取り組みでも、労働組合はダメだと言っていました。アメリカも組織率が低下していて、現状は日本の実態と重なって聞こえました。
　大会終了後にマーシャさんが、外国からの訪問団に対して自動車工場（フォード・GM）のエクスポージャーや、公園での焼肉パーティーをやって頂き、最後まで私たちを歓迎してくれたことに感謝の気持ちで一杯です。
　あと、ウェイン州立大学でのハイジさんの取り計らいで「日本労働運動セミナー」が開催されて、多くの学者が参加して熱心に耳を傾け、多くの質問がだされました。今後も日米の交流と連帯と連携が大切だと感じました。
　今回のデトロイトでは、マットさん、ジョンさん、ハイジさんのお陰で素晴らしい想い出が出来ました。

シカゴ気まま旅

　殆どの人が９日に帰国しましたが、小生と小畑氏の２人が１３日までシカゴに行きました。往路はバスでのんびりとシカゴに入りました。２人ともシカゴは初めてで、まず最初に３日間バス、電車、地下鉄乗り放題のカードを１２ドルで購入して、ループ（高架鉄道）で町の雰囲気と地理を知るためにダウンタウンを一周しました。ガイドブックで見た通りシカゴの町は世界に誇る摩天楼郡とミュージアム郡と言われているように素晴らしい町並みでした。それと交通機関が網羅されていて、地図を片手に自由に何処へでも行けるようになっていました。しかも、どの乗り物も空いていて何時も座れる状態でした。
　また、私たちの泊まったホテルの前にはマクドナルド（発祥地と言うことで１９５０年代から、はやった物や写真が装飾されている店）があり、飲食店が沢山あり、最後の夜はブルーシカゴでブルースを聞きながらお酒を飲みました。ライブが始まると店は満タンになり立ち見が出るほど盛況で、日本人がギターを弾いていました。驚いたのは高校生がバスで来てバーに入ってブルースやジャズを聴いていて、生徒と先生で店が満員で飲みに入れない店もありました。日本では考えられないことです。
　あとは、マットさんの友人の弁護士さんを紹介されて、アポを取ったのですが忙しいために会えず、その代わりにＳＥＩＵの事務所を紹介して頂き、話を聞くことが出来ました。
　３日間の短い滞在でシカゴの町を垣間見ただけですが、高層ビル群の美しさや、多くの博物館見学や、夜には酒を飲みながらブルースやジャズのライブを聴いて堪能しました。
　デトロイトに向けて１３日の夜に、列車（AMTRAK）に乗って楽しかったシカゴをあとにしました。

グローバル企業トヨタとの闘いをフィリピントヨタ労組と共に！
ートヨタの組合敵視、組合つぶしをゆるさない！ー

Oidon(フィリピントヨタ労組を支援する会)

なぜ世界から注目され世界的な闘いになっているのか？

フィリピントヨタ労組（TMPCWA）は、被解雇者233名の原職復帰、団体交渉開始、26名の刑事起訴の撤回を要求して闘っています。この闘いは2001年の大量解雇から6年目、2000年フィリピントヨタ（TMP）の団体交渉権拒否から7年目に入っています。この闘いは当初から現地TMPに対してだけでなく日本でトヨタ自動車に対しても行われてきました。そして2004年のILO総会以来世界から注目され、現在国際金属労連（IMF）を含めた世界的な闘いになってきています。この闘いが世界から注目され、世界的な闘いになっている理由は、労働組合を嫌悪し労働組合を破壊する行為が、発展途上国の一つであるフィリピンで、日本のトップ企業であり資本主義先進国の製造業No.1企業トヨタによって行われていることです。

トヨタは発展途上国で国際条約・現地法をまもらない！

国際労働機関（ILO）条約第87号、第98号は、労働組合の自主的団結、自主的な団体交渉に介入制限してはならず、それを促すべきだとしています。この精神は労使関係の国際規範として資本主義先進諸国ではすでに一般的に認められています。今年1月連合の組合と別個に、日本のトヨタグループ4社を横断する組合員6名の労働組合「全トヨタ労働組合」ができましたが、トヨタ自動車などトヨタグループ各社はこの組合を認めて、団体交渉に応じました。日本の労働法からも国際条約からも当然です。

しかし多国籍企業とりわけ日本の多国籍企業にとって発展途上国ではこれは決して常識ではありません。トヨタも例外ではありません。フィリピントヨタの労働者は3度も自主的に労働組合を結成し団体交渉を試みました。しかしこの試みは未だに成功していません。TMPがその全てを妨害したためです。TMPは労働組合の結成に異議申し立てをし、労働組合が公式に団体交渉権を獲得しても団体交渉を拒否し、裁判を延々と続けました。そして、それに抗議する労働者を解雇し、刑事告訴しました。この解雇に抗議するストライキを政府に圧力をかけて中止させました。最高裁で団体交渉権の仮差止要求が否定されたにもかかわらず、TMPは団体交渉を拒否し続けました。

トヨタは途上国子会社の不法行為の責任を取らない！

フィリピン政府はILO条約第87号、第98号を批准しています。しかしフィリピンの労働法はこの精神に反するさまざまの条項を残しています。こうしたことはほとんどの発展途上国で普通に見られることですが、トヨタや多国籍企業の多くは発展途上国でこうした自主的な労働組合の結成、自主的な団体交渉に介入制限する法律を労働組合を抑圧破壊するために利用しています。

また、発展途上国政府に圧力をかけ、こうした問題のある現地法にさえ違反して組合抑圧、組合破壊を行わせています。

そしてトヨタと多国籍企業の多くは、多国籍企業の本体がこうした組合抑圧、組合破壊を指示し承認しているにもかかわらず、そのために起きた紛争を日本とは異なったフィリピンの問題であるとして、多国籍企業としての責任を取りません。日本政府もまたトヨタ自動車と TMP の行為が「OECD 多国籍企業ガイドライン」「多国籍企業 ILO 三者宣言」違反であるにもかかわらず、TMPCWA と「支援する会」の申し立てを放置しています。TMP など発展途上国多国籍企業子会社の反労働組合行為は現地法と現地政府に擁護され、多国籍企業本体と政府はこの子会社の行為の責任を取ろうとしないのです。

多国籍企業に現地法、国際条約を守らせねばなりません！

1970年代以後資本主義先進諸国の多くの巨大企業が資本を世界に展開し始めました。とりわけ90年代から多国籍企業は全産業で中堅企業も含めて大量に国境を越え、発展途上国の安い労働力を劣悪な労働条件で雇い、国際条約も現地法も守らずに、世界中で激しい競争を行うようになりました。この資本のグローバル化の中で多国籍企業は発展途上国を経済的には事実上支配するようになり、途上国政府は資本の海外逃避を恐れてこの多国籍企業の圧力を受け入れるようになりました。そして、先進諸国の政府はこの多国籍企業の動きを積極的に後押しし、国内においても規制緩和・民営化を進め、労働者を国際的に競わせ、労働者の非正規化を進め、日本においても、年収200万にも満たない低い賃金、労働時間の延長、過労死・自殺に示されるような劣悪な労働条件、サービス残業、労災隠し、社会保険未加入、賃金不払い、そして奴隷労働に至るまでの不法状態が急速に構造化しています。多国籍企業は労働者をより安く、より劣悪な労働条件で働かせることに必死です。いま全世界的な労働条件の切下げ競争が進行しています。

私達は日本において労働者の労働条件、生活条件の改善の闘いを進めなければなりません。しかし、多国籍企業が世界に展開し私達を世界の労働者と競争させようとしている以上、私達は世界の労働者と団結し、特により劣悪な状況に置かれている発展途上国の労働者と団結し、彼らの課題を一緒に解決していくことなしに、私達の日本での課題を前進させることが困難になっています。トヨタとすべての多国籍企業に発展途上国の現地法はいうまでもなく国際条約をも守らせていくことが必要です。

トヨタに対する闘い通じて世界の労働者との団結を！

東アジアの発展途上国で TMPCWA のような大量解雇の例は多くあります。しかしこうした大量解雇に対する闘いが５年を超えて続いているのは稀有な例です。発展途上国の生活条件は私達資本主義的先進諸国のそれとは比較を絶する困難な条件にあります。多くの場合闘いは僅かの金銭解決で事実上終息しています。フィリピントヨタ労組の闘いが今もなお力強く続いているのは、なによりも労働者とその家族が３度の組合結成の試みから団結の重要性を学んできたからです。また、彼等の闘いが当初からフィリピンの地域の仲間とトヨタ自動車の本拠地日本の仲間に支えられてきたからです。残念ながら今の私たちには東アジアだけでも無数に起きている日本の多国籍企業の争議を支える力がほとんどありません。であるからこそ、今支援しているこのフィリピントヨタの闘いで負けるわけには行かないのです。IMF も7年続いているこのフィリピントヨタの闘いに注目し、この闘いを日本の多国籍企業に発展途上国で現地法、国際条約を守らせる突破口にしようとしています。トヨタ本体を交渉に引きずり出し、トヨタ本体に多国籍企業の世界的責任を果たさせなければなりません。そのために、私達はトヨタ自動車に団体交渉を要求し、団交拒否を神奈川県労働委員会に不当労働行為救済の申し立てをしています。

私達は、多国籍企業子会社の象徴としてのフィリピントヨタ問題で、グローバルな世界を代表する多国籍企業トヨタと、現地フィリピントヨタ労組と共に、世界の労働者とともに闘っています。この闘いで勝利し、更にこの闘いを拡大し、世界の労働者全体の労働条件、生活条件の改善を前進させていかねばなりません。

フィリピントヨタ労組を支援する会会員になってください。

個人：一口　5,000円　　団体：原則として二口　10,000円

郵便振替口座：00290-7-60036　　加入者名：「フィリピントヨタ労組を支援する会」

TEL / FAX：046-869-1415V　e-Mail ：protest-toyota@list.jca.apc.org

ＨＰ ：http://www.geocities.jp/protest_toyota/

ユニオン全国ネットワーク　第２次訪韓団に参加して

非正規が５割をこえる韓国の粘り強い闘い

長谷川　実（神奈川 県央ユニオン）

６月初旬、コミュニティ・ユニオン全国ネットワーク(71の個人加入の地域ユニオンが加盟)の韓国交流ツアー(12名)に参加することができました。テーマは３つでした。

▲チョン・テイル像：ソウル平和市場（70年11月13日、劣悪な労働条件の女子被服工のために「勤労基準法を守れ」と焼身抗議。毎年の民主労総全国労働者大会(05年は5万人)は「チョン・テイル精神継承」として 11.13 前後に行われている）

一つ目は、日本ではパート、派遣などの非正規労働が３割強(女性は５割)にもなっていますが、韓国ではさらに「特殊雇用」と称して労働基本権を認めない雇用形態も含め非正規で働く人が５割(女性は７割)と深刻なので、その奮闘振りを知ることでした。97年韓国通貨危機でＩＭＦが構造調整と称して介入し、非正規大量創出の労働破壊が日本以上に進んでいます。

組合組織率は 11%と決して高くありませんが、最近の組合員数は、戦闘的な民主労総が労使協調派の韓国労総を追い抜いたそうです。現代、起亜、大宇など大手自動車メーカーの本工組合などは、日本ではＩＭＦＪＣ(国際金属労連日本協議会)に加盟していそうなのに戦闘的な民主労総の中心勢力です。

しかし、社内下請けなどの拡大に対して取組が鈍く、そこで「非正規労働センター」や「全国非正規労組協議会」が独自の組織化で本工組合に刺激を与えているそうです。今は多くの産業に3000名、60支部に成長、拡大が期待されています。また、一方これら非正規撤廃闘争で 10 人ほどの組合員が憤死し、命がけの闘いという側面もあるそうです。

その非正規問題の象徴として、ＫＴＸ（新幹線）女性乗務員の正規化要求での100日以上の座り込みがソウル駅で行われ、国際ニュースにもなるほどでした。駅の雑踏で署名を求める若い彼女らの表情は、本当に生き生きしていました。

民主労働党の躍進

そうした職場での闘いから社会的アピールのほかに、５月31日の統一地方選では、民主労総が実質創設した民主労働党が躍進し、800 人の候補者が12.5%の得票率で１割を当選させたそうです。やはり労働基本権の確立のためには、政策要求も必要と実感しました。

今回の日程の中で、全羅北道地域本部で金属連盟の役員に、フィリピントヨタ労組を支援する会機関紙と英文のＩＬＯへのアピール文書を渡すことができました。韓国ではトヨタ生産方式をＪＰＳと称し、各産業に急速に浸透させ、日本財界人との頻繁な交流によって日本の労務管理、労働諸法の改悪を輸入しているそうです。日本での闘い如何がアジアに大きく影響していることは間違いないでしょう。

▲畜産協同組合での解雇篭城闘争850日(全羅北道イクサン市)

従軍慰安婦 抗議集会―13 年 700 回余
ソウル日本大使館前

二つ目は、元従軍慰安婦　(韓国では挺身隊と呼ぶ。本人らは「慰安したつもりはない、拉致され性奴隷にされただけだ」と主張)の、日本大使館前での 13 年 700 回を超えた水曜集会に参加することでした。ソウルの西大門刑務所跡（抗日運動の政治犯拷問・死刑場）の見学と相まって、日本の歴史犯罪を学ぶことでした。

元挺身隊の 80 歳を越えるハルモニ達は、日本での裁判闘争をも闘い、国際世論も大きく日本政府を批判しているにもかかわらず、未だに清算しようとしないことに対し、「ただ死を待つつもりはない」と言っているようでした。

ピョンテクの米軍基地闘争ー生きる権利は闘い取るしかない

三つ目は、米軍の再編による基地拡張で揺れる平澤（ピョンテク）の農民との交流。8 つの基地を統廃合し、ピョンテクにあるオサン空軍基地、キャンプハンフリー、射撃場、弾薬庫を、さらになんと倍の 800 万坪以上(ピョンテク市面積の 11%)に拡張するのだそうです。

先月 5 月 4 日、軍の正規兵と戦闘警察１万８千人で、超法規的に強制執行。重傷者多数。田植えを終えたばかりの水田は重機でめちゃくちゃ。以来、農民たちは毎夜キャンドル集会。ほとんど高齢のハルモニ、ハラボジ。集会後、支援者の宿泊所「平和の風」と呼ぶ、移転した条件派の家屋で交流。支援者は「おばあさんたちは、本当にただ田を耕したいだけだ。鉄条網で囲われてしまって、田んぼにいけないのは、わが子に会えないのと同じくらいつらいと言っている。」という説明が胸に迫りました。米韓ＦＴＡという農産物自由化による農業破壊への怒りも当然激しい。

▲ピョンテク支援ハンスト　(青瓦台)

かつての成田空港反対闘争に似ている感じがしました。しかし、支援の層は厚く、民主労総・学生のみならず、教会の神父、シスター、若いミュージシャン、画家、彫刻家などの芸術家などがそれぞれの資質を生かして参加していました。特に高さ 10m を越える竹製のモニュメント「青い鳥の像」や民衆芸術家教会の迫力ある現地展覧会などは素晴らしい反戦表現でした。また大統領府青瓦台前では、有名なムン・ジョンヒョン神父の支援ハンストなど「闘いの豊かさ」を実感ました。日本からも、「神奈川の基地撤去目指す共闘会議」や沖縄の基地と闘う人々が訪れたり、若いフィルムジャーナリストが 2 月から常駐撮影し支援しています。

世界同時進行の攻撃に共通認識が大切

新自由主義とかいう弱肉強食の経済政策、言うことを聞かないやつは軍隊で押さえつけるやり方を再認識。日韓の労働破壊の共通性、韓国の基地再編と沖縄、キャンプ座間、横須賀の軍事強化との同時性を目で実感。でも闘いの思いと勢いは労働者、市民、農民のどの面でも日本と違っていました。韓国の労働者は権利の全てを、命がけでひとつずつ勝ち取ってきたのです。日本ではとんでもない危機なのに、昔の与えられすぎが、怒りと抵抗の気質を奪ってきたのかと、ずいぶん考えさせられました。

今回は、ＡＰＷＳＬの韓国窓口であるオサン移住労働者センターなどとの交流の準備などができませんでしたが、90 年代のアジアスワニ―争議支援から全港湾関西などの皆さんの 15 年余に渡る定期交流のおかげで、実に幅広い見聞が実現しました。

帰国後、勇気がわいてきました。アレンジしてくれた皆さん、韓国で出会った皆さんに感謝しつつ、やはり運動は愚直にやり直すしかないなと思っているところです。手遅れだとあきらめずに。

ＡＰＷＳＬ関西から

ノーモア尼崎事故キャンペーンに関わって

丹羽通晴（APWSL 関西）

今回の関西記事は「ノーモア尼崎事故キャンペーン」という指示があり、その件について山原さんは書き尽くしたと言い、そんなこんなでお鉢が回ってきた。といっても、もう随分と月日が経過している。そのうえ、私自身は裏方稼業に専念していたから、国際シンポジウムは聞いていないし、尼崎事故現場への追悼と抗議のデモにも参加していない。だから、実行委員会に関わった者としての感慨やら感想を語るしかなく、つまりはキャンペーンの中身はすっ飛ばしたサイド・ストーリーだけであることをお断りしておく。

３つできた実行委員会

キャンペーン行事としては、国際シンポジウムが４月２２日に尼崎、２５日に東京で開催され、２３日には尼崎駅前集会と事故現場へ向けてのデモが行われた。呼びかけは昨年１２月で、幾度かの相談会を重ねて東京実行委員会ができた。尼崎行動にもツアーまで組んで首都圏から１００人ほどの参加があった。国鉄闘争共闘会議・鉄建公団訴訟原告団が事務局をにない、尼崎への参加構成を見ると共闘会議や中小労組政策ネットの参加組合・活動家が主体であったと思われる。

関西でも東京からの呼びかけを受けて１２月下旬に最初の集まりをもち、その後は３回の会議をもった。こちらは滋賀、京都、大阪、兵庫の国労闘争団・訴訟原告団を「支える会」や「守る会」の主要メンバーで構成し、国労熊本闘争団大阪事務所を事務局とした（といっても、１人の常駐団員の事務所兼ねぐらだが…）。そして、２月末に地元の兵庫でも実行委員会が結成されたが、これは自治労兵庫県本部、全港湾神戸支部、尼崎地区労など労働組合主体の実行委員会になった。そんなデコボコした３つの実行委員会が連携しつつ準備をし、それぞれにチラシを作り、当日の運営を行ったのである。些末な意志の齟齬やトラブルは数多くあったが、幸いにして大トラブルは発生しなかった。

ところで、兵庫実行委員会の中心メンバーたちはもともと、「ＪＲ尼崎駅前集会と事故現場へのデモ」を第一義に考え、国際シンポについては「東京単独か、せめて大阪開催」という意向だった。連日の取り組みは「組合員の動員が難しい」ということだったが、「関西でやるなら、やはり尼崎だろう」という正論に勝てなかった。結果、国際シンポは１００人収容の会場に２００人ほどが参集し、駅前集会は約５００人で人数的にはいまひとつだった。「シンポには来なくていい」という逆オルグ(！？)が、駅前集会への結集力をも弱める結果となったようだ。

労働組合はどこへ行った…

このキャンペーンでは、イギリス・ＲＭＴ（鉄道海員運輸労働者全国組合）、フランス・ＳＵＤ－ＲＡＩＬ、韓国鉄道労組の各組合代表が来日し、シンポや集会で発言した。ところで、国労はどうしたのか。国際シンポの尼崎と東京、尼崎駅前集会でも国労メンバーの発言はあったが、それはあくまでも「個人」（たとえ機関役員であっても）としてである。尼崎シンポがあった４月２２日、国労近畿地本は西日本労組（ＪＲ連合系）との共催集会を、なぜか豊中で行っていた。その集会で国労の代表は、翌日以降に計画されている西労（ＪＲ総連系）のストライキを非難する発言を行い、職制ばかりの西労組から万雷の拍手を受け

ていたという。

あるいは、尼崎事故の犠牲者（死者）について、ＪＲ西日本は「１０６人」と言っている。高見運転手は犠牲者から除外されているのだ。百歩譲って会社の公式発言としては「あるかもしれない」。それとても、事故責任をすべて運転手に押し付ける意図を感じるのだが…。しかし、国労を含めて労働組合までもが「１０６人」と言っているようなのが情けない。ちなみに、事故１周年の４月２５日には遺族主体の追悼行事があり、遺族間で議論があったそうだが、犠牲者は「１０７人」とされていた。

「あるべき」論というのはあまり好かないのだが、あえてその論法で言えば、「ノーモア尼崎事故キャンペーン」は本来、ＪＲに足場がある国労が提起すべき課題である。それが全くなく（少なくとも私の耳には届いていない）、ＪＲから足場をはずされた鉄建公団訴訟原告団から発せられたのが、現在の日本の労働組合運動を象徴している。そういう国労に引きずられてか、全労協からの発信もなく、当然のように全労連も連合も無関係。いずれのセンターも関与しなかった結果、デコボコの３つの実行委員会でやらざるを得なかったのだ。その意味では、労働組合主体の実行委員会を形成した兵庫は、あえて「意地を張った」と言えなくもない。だが、その兵庫でも、連合結成時に対抗して結成された兵庫県共闘（全労協オブ加盟）は、この３月に解散した。ナショナルにしろローカルにしろ、労働組合のセンターもそろそろ曲がり角にあるような気がする。

国鉄闘争もいよいよ正念場

「４党合意」をめぐって国労、闘争団ともに対立・分裂状態に陥ったが、国労近畿（西日本）ではそのうえ以下の別事情があった。革同（共産党系）の主流体制に対して、社会党員協グループは圧倒的少数派であり、内部に「４党合意」について賛否はあるが、反主流派の「統一と団結」を維持するために、そのことに触れないという空気がある。「物言えば唇寒し」という雰囲気が、少なくとも端から見ているとあった。　だが尼崎事故で、その空気が変わりはじめた。地本があまりにも会社寄りということもあり、「あの分割民営化反対闘争は何だったのか」という思いや、改めて民営化や公共交通のあり方を問う姿勢が出てきた。少なくとも「黙っていてははじまらない」という空気が広がりつつある。会社からも組合からも睨まれるだろうに、シンポでも集会でも発言をし、駅前集会には３０人ほどの国労活動家が結集した。首都圏からもいくつかの国労支部から合わせて２０～３０人の参加があった。数としてけっして多くはないが、この面々が発言し行動していかないかぎり、国労は変わらないだろう。

「１０４７人の解雇」問題については、昨年９月の鉄建公団訴訟東京地裁判決を受けて以降、大きな変化が出ている。２．１６、４．４、６．１６と、訴訟団と国労本部が同席する集会が続いている。闘争主体が「一本」にならないかぎり、向こう側（国、公団、あるいはＪＲ）が相手すらしないだろうことを考えれば、ようやくにして再び、解決に向けてのスタートラインに立ったといえる。とはいえ、前途は多難だ。３つの集会ごとに呼びかけや主催形式が違うことを見れば、駆け引きやら綱引きやらが続けられているだろうことが想像できる。「いつまでゴタゴタやってるんだ！」と怒鳴りたくもなるが、闘争主体がはっきりしっかりしないかぎり、支援者としてはどうしようもない。

ノーモア尼崎事故キャンペーンについて書きはじめて、事故問題の中身はすっ飛ばし、結局は「１０４７人の解雇」問題に至り着く。自分自身の問題意識のテリトリーがそうなのであるが、今回のキャンペーンの実施主体もそうなのだ。民営化がもたらした問題、公共サービスのあり方、労働組合の役割…、それらが問われた取り組みだったと思う。

（写真はレイバーネットサイトより　提供樺浩志さん http://www.labornetjp.org/news/2006/0425ama/view）

レイバーアジア紹介 ――――――――――――――――――――――――――――

開設されたレイバーアジアにまだ多くの課題

高幣真公(APWSL 日本委員会　調整委員)

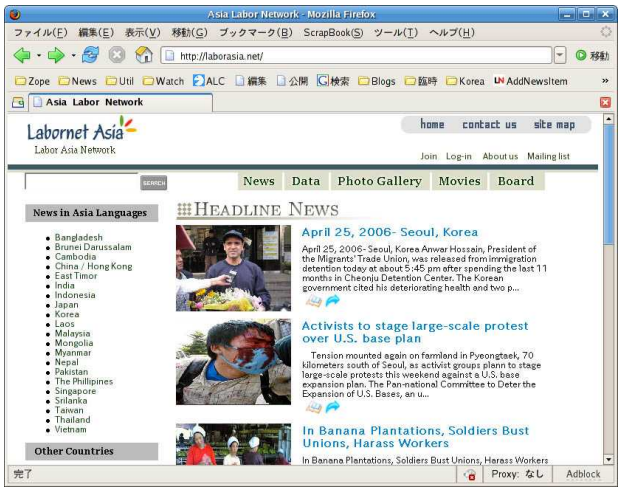
WEB サイト「レイバーネットアジア」”Labornet Asia ”の創設が初めて議論されたのは 2004 年 1 月にインドのムンバイで開かれた WSF（世界社会フォーラム）であった。APWSL の７カ国代表が参加して APWSL の臨時会議を開き、APWSL の再建策を議論した。日本委員会は韓国委員会と共同で次の提案をした。欧州の基金が打ち切られ APWSL は財政をほぼ自力でしか支えられない中で活動を続けるためには、インターネットを活用した情報交流に重点を移す必要がある。具体的にはレイバーネットアジア（WEB サイト）の創設するなどいくつかの活動方針を確認した。続く 2005 年 5 月マレーシアのクワラルンプールで開いた総会で、WEB サイトとメーリングリスト開設を正式に決定した。WEB サイトは韓国、メーリングリストは日本委員会がそれぞれ責任を持つことになった。同年 10 月メルボルンで開いた書記局会議で、WEB はチャンウォンさん（韓国）、メーリングリスト（APWSLMembers）山崎精一さんが担当することになり、いずれも 12 月に動き出した。

APWSL 日本が管理するメーリングリスト APWSLMembers (APWSLMembers@labornetjp.org) は 40KB の制限を越えた投稿や禁じた添付ファイルがあったり、特定の人・国に偏るなど問題を抱えながらも徐々に定着し、現在週に 10 便程度と活用が広がりつつある。

もう 1 つの韓国が管理する WEB サイト (Laborasia http://www.laborasia.net)は開設されたが、現在では韓国（チャンのォン）以外使われず、アクセスも不安定と問題を抱えている。画面表示にハングル残る言葉の問題、ページがブロードバンドを前提にした動画など大きなデータが中心になっていて、誰でも容易にアクセスできないなど問題を抱える。さらに現在のシステムでは、ID を登録すれば誰でもニュースを掲載できるが、悪戯や悪意の改ざんを防ぐために投稿者を制限することが必要だ。また、アジアの加盟各国の言語ページがあるが、そのページの管理はその国の委員会に限定すべきである。現在サイトにない加盟各国の団体や協力組織へのリンクも不可欠だ。サイトの改善と共同利用のために WEB 管理者と各国メンバーとの英語のメールでの通信システムが重要だ。

このように APWSL のＷＥＢサイト（Laborasia）の解決しなければならない課題は多い。サイトは韓国と日本が共同で管理することになっている。実際に運営管理している韓国側に希望を伝えようと、日本からチャンウォンさんへメール（英語）を送っているが、チャンウォンさんから回答がない。またレイバーネット日本の安田弘幸さんに日韓のパイプをお願いしているが、成果を上げていない。

4 月に大阪で開いた全国運営委員会で、日韓 2 国間交流の計画を今秋ソウルで両国合同運営委員会を開催する計画を決めて、日韓が直接討論し改善策を講じることを韓国側に提案することにした。日韓の言語と文化の壁は大きいが、アジア太平洋の多数の民族が参加している APWSL のＷＥＢサイト「レイバーアジア　Laborasia」を前進させるためにこの壁は早急に取り除いていかねばならない。　（2006/6/21　記）



編集部より

▼今回はレイバー・ノーツ大会ツアーの特集になりましたが、詳しい報告集が出ますのでどうぞそちらもご参照ください。APWSL ではなく、いろいろな事情から共同代表の山崎さんの企画なのですが、これまでおこなってきたさまざまな活動のネットワークを生かして積み重ねた上にできたもので、参加者の方たちの満足感は紙面から伝わってくると思います。そして労働NGO や移民の闘いから学べることも多そうです。

▼韓国のコミュニティ・ユニオンのツアー報告も同様ですが、こうしたツアーでは、自分の場所で闘っている人が、海外で同様に活動する人たちと出会うことによって感動を得、エンパワメントされる意義はもちろんですが、現場で働く人々同志の交流が報告されて共有されることも重要なことだと思います。

▼運動に関わっていても、グローバリゼーションや海外の運動の情報を知らない人が結構多くて驚かされますが、リンクスは、日本の中では残念ながら普通に生きていてもなかなか受け取れない貴重な情報を生でお伝えしているなあと今回手前味噌ながら感じました。APWSL の活動はなかなか実感されにくいものですが、このような機能をこの機関紙が果たしていることは、自負してもいいかもしれません。これまでも、世界社会フォーラムや香港の WTO など、編集の怠慢で少し鮮度が落ちながらも、貴重な情報を生でお伝えしてきたと思います。（自画自賛？）

▼できればもう少し日本の状況を伝える記事が必要かも？とても貴重な活動も、書き記されなければ本人たちの記憶だけになってしまいます。活動する本人は、書き残す余裕もなくまた日常すぎてその貴重さに気づかないことがよくあります。編集長をおおせつかったときに、そうした足元の活動を伝えられる記事を入れたいと思ったのですが、なかなかできませんでした。そうこうするうちに皆さんが退職してしまいそうで、またそれによって会員が減る懸念もあります。貴重な、読んでよかった、人にも読んでもらいたいと思う内容を備えた機関紙にして、若い人たちにも手渡してひろげ、活動費として財政を支える基盤をつくる、とうまくリンクさせていく必要性を感じます。

▼今回は少し薄いし、レイアウトもあまり丁寧にできなかったし、実際は質としてまだまだですが、アイディア、アドバイスをお寄せください。投稿歓迎です。

▽私事ですが、スウェーデンから帰ってきて、リンクスの連載を愛読してくださった京都のアジェンダ･プロジェクトの方が話す機会を与えてくださり、今回雑誌アジェンダの「脱・格差社会！」の特集に載りました。良かったら読んでくださいね。
http://www3.to/agenda/

▽尼崎で仕事を始めたりしましたが、スウェーデンの状況とは全く違う IT 土方の現場にカルチャーショック、「尼崎から hej!」が始まるかと思いきや体よくお払い箱になってしまいました。日本で仕事をするのはしんどそうです。あんなに労働時間を減らそうし、非正規雇用差別をなくそうとし、男女とも安心して楽しく納得して働き続けられる社会をめざして一生懸命活動したのに、何をどうすればよかったんだろうと思うことしきりで、答が見つかりません。リンクスで元気をもらいたいのはどうも私の方のようです。

▽APWSL 関西は、漫才みたいで面白く、紙面にもそんな雰囲気が出るといいなと思っております。

次回乞うご期待！（さ）

LINKS　―リンクス―　No.44　2006 年 7 月

●発行所　東京都台東区上野 1-1-12　新広小路ビル　協同センター労働情報　気付
電話　03-3837-2542　FAX 03-3837-2544

●関西連絡所　大阪市北区天満 1-6-8 六甲天満ビル 201 号　ゼネラルユニオン気付
電話　06-6352-9619　FAX 06-6352-9630

● E メール　apwsljp@jca.apc.org　URL　http://www.jca.apc.org/apwsljp/

● 郵便振替　00180-3-137822

● 編集長　榊原裕美　編集委員　山崎精一、高幣真公、渡辺　弘、山原　克二

● 印刷　中原　逸雄　レイアウト　稲垣　豊

● 定　価　300 円